

# 北川駿名誉教授の人となり

小 倉 信 次

## 1. 主なご経歴

北川駿先生は、1967年3月に順天堂大学体育学部をご卒業後直ちに、本学商経学部にはスポーツ科学担当の助手として着任された。その後、専任講師（71年4月から78年3月まで）、助教授（78年4月から86年3月まで）を経て86年4月に教授となられた。本年（2012年）3月におけるご退職まで、45年間にわたり専任教員として本学発展に力を尽くされ、本学の歴史に大きな足跡を残された。名誉教授となられた現在も、引き続き、非常勤講師として学生教育に携わっておられる。

北川先生のご在職期間は長いですが、それでもなお定年退職の年令に達しておられたわけではない。筆者の推測ではあるが、半ばは長いご勤務からの解放を望まれ、半ばは人生の新目標への歩みを早めに開始されるために、気力・体力面の余力があるうちに退職する道を選ばれたようである。2年早いご退職であるが、何年か前、個人的には60代半ばでの早期退職のプランも伺ったことがある。

さて、専任教員としての北川先生は、学生の健康と体力の向上に心を砕かれる一方、バスケットボール部の部長・監督を始めとしてアメリカンフットボール部や公式野球部の部長を引受けるなど運動部の発展にも尽力された。助手時代の1970年には、運動部に所属していない学生のために竣工なった体育館運動施設の一般開放を実現し、またクラス・ゼミを単位とする学内スポーツ大会開催をスタートさせて、その運営にも携わられた。こうした新しい試みの中に、学生・教職員のために労を惜しまず奔走された北川教授の若き日の姿を垣間見ることができよう。

その教授時代の北川先生は、長期にわたって多忙な学内の要職を歴任された。商経単一学部時代の学生部長を2年間、複数学部時代に移行したあとの学生部長を4年間、学校法人の理事と評議員をそれぞれ8年間にわたり引き受けられた。これらの役職は同僚の支持を得て就任されたものであり、その歴任期間の長さも地位・名誉に括淡としていて、また何事にも労を惜しまず奔走される北川先生への信頼や期待がいかに大きかったかを物語るものである。

## 2. 人としての北川先生とご功績

大学が体系的なカリキュラムに拠って研究・教育サービスを行い、学位を授与する機関であり、また多くの学生と教職員が集う場である限り、必然的に「学内行政」と呼ばれる様々な業務が派生し、教員もその一端を担わなければならない。北川先生が引き受けられた要職が、まさにこの「学内行政」に当たる。「学内行政」と研究・教育をどのように関連付けるかは、両者に特段の内的・必然的な関係がないせいであろうか、実に人様々である。こうした関連付けという点で、北川先生は、強い意思で両者を関連付けながら職務をこなされた方だったように思われる。力のある側には与せず、学生・教職員の力になりたいというのが、その強い意思の中身である。その実現のためには、権限のある役職に就くのも躊躇すべきでないと考えられたに違いない。

ところで、北川先生のご出身は熊本県、そしてその県民性は「肥後もっこす」、つまり、（通説に従うと）純粋で正義感が強く一度決めたら梃子でも動かず、また一方で、曲がったことが嫌いなため駆け引きが苦手、他者を説得する粘り強さに欠け、組織で活躍するのに向かない、とのことである。筆者から見れば、反骨精神が旺盛というのは当てはまるが、他者を説得する粘り強さに欠けるとの部分は、完全なハズレである。先生の「肥後もっこす」ぶりが前の半分についてだけだったことは、本学にとって実に幸いなことであった。

以上を要するに、北川先生の真骨頂は、広く学生と教職員の学び・教え・仕事の環境や諸条件の向上のために、時には利害の異なる相手の懷に飛び込んで自説を説き、労を惜しむことなく奔走し続けられた点にあったのである。

最後に、役職に係わるご功績であるが、ここでは北川先生の人となりを示すひとつの例だけをエピソード風に取り上げておきたい。

先生は、学生部長として学生の健康や栄養面の改善や、学ぶ場である教室の数の確保、教員の対学生比率の改善などには、様々な課題のなかで特に関心を強く持たれたように思う。学生の健康や栄養に係るご提案のひとつに、昼休み時間を40分間から1時間に延長する案件があった。加藤寛・前学長時代のことで、2004年かその翌年のご提案であったと記憶している。

その時、先生は学生部長で、理事・評議員も務めておられたが、当時の学部長会

(学長・学部長・部長からなるもの)で、本学では昼休み時間を40分間としてきたため学生が昼食をゆっくり摂ることができず、また生協食堂などに長蛇の列ができる要因にもなっているので、延長して1時間にすべきである旨の論を展開された。まさに正論であった。5時限目の終了時刻が午後6時となり、スポーツ系の部活動などに支障をきたす懸念もあるなど乗り越えるべき関門も控えていたが、先生は粘り強く主張を続けられ、実現にこぎつけられたのである。

釈迦に説法ではあろうが、ご退職を機に、今後のご自身の健康になお一層気を付けられ、新たな目標や楽しみに向かってゆっくりと歩んでいただければと念じている。